

## 子どもが他者を受け止めることのできる教育を

音声詩人・映像作家、日本朗読ボクシング協会代表

楠かつのり

声には、いろいろな感じ方が詰まっています。声色というように声は色を持ちます。例えば、黄色い声とかがあります。また、声に対する形容も多彩です。猫なで声、裏声、濁声、胸間声、金切り声などどうまく形容されています。甘いや渋いといった味覚からの転用や、高低、大小に基づく分類もあります。さらには、表情と同様に声は喜怒哀楽を映し出します。体調や微妙な心理状態までも声で感じ取ることができます。この声に注目して、声を楽しく味わい、人とのコミュニケーションを学ぶ場を作りたい、その強い思いがあつてわたしは「詩のボクシング」を全国に広めています。

「詩のボクシング」とは、青コーナー、赤コーナーの二人が制限時間内に自作を交互に朗読して、聴き手の代表であるジャッジが、どちらの声の言葉がより心に届いたかを判定する「声と言葉のスポーツ」です。ここでは、自己中心的な独りよがりな声と言葉では勝ち進むことができません。負ければ悔しい思いもしますが、その先に人の気持ちや言葉を理解した他者に伝えられる声と言葉があることを学ぶこととなります。

わたしは、十五歳以上が出場できる一般参加の大会の他に、全国各地の教育現場にも出向いて、「詩のボクシング」について教えています。理由は、子どもたちにこそ他者と出会える喜びを知ってもらいたいからです。

学校を訪ねる前は、どんな子どもたちに会えるのだろうかと気持ちが弾みます。そして、教室または



児童の数が多い場合は音楽教室や体育館に案内されて授業をします。挨拶を交わした時は、みんな元気そうです。ところが、授業始めてしばらくすると、気になることが出てきます。それは少数派になるのでしょうか、体が感じていることをうまく言葉にできない子どもたちがいるということです。この傾向は、小学校では「個人差はありますが」学年が上がるとほど顕著になっていっているように感じます。

低学年の1、2年生では、使える言葉をそれほど持っていないので、体で感じていることと言葉がイコールで繋がっていると感じます。低学年では、体の動きを見ているほうが、言葉の意味合いも分かるといったところでしょうか。

中学年の3、4年生は、とても元気で、体を感じていることをストレートに言葉に繋げて表現しようとしているように見受けられます。

高学年の5、6年生になると、言葉と体で感じていることのギャップをうまく埋めることができなくて、むしろ戸惑っているように感じられます。これを恥じらいを覚え始めたと表すこともできるのでしようが、だとすれば、彼らにとつての恥じらいとは、体を感じていることが全てオープンにできないことだと分かり始めたということになります。つまり、言い換えると、言葉の嘘への歯痒い罪の意識が芽生えるともいえることなのではないでしょうか。



しかし、この歯痒い罪の意識といえるものはとても大切です。言葉は、誠実に正しいものを伝えるものだという幻想がわたしたちにはありますが、子どもの成長の中で言葉との関わりを冷静に見ていると、言葉と体とが乖離する感覚を覚える時期があります。

これは「言葉の嘘」を知ったということでもあるのですが、しかし、そこから本当の意味での言葉との付き合いの始まりとなるのです。

このことに関して、詩人のまど・みちおさんが興味深いことを話していました。まどさんは、言葉は嘘をいうためにあるとして、その嘘はわたしたちが進化を重ねる段階で、それまでいろいろ動物の声や自然の音を理解できていたものが、言葉を持つことよって、逆に理解できなくなったことに起因しているのではないかということです。理解できないことを理解するために言葉で表わそうとする、そこに嘘が生じるといふことなのでしょう。風や川の音、動物や生物の鳴き声に耳を澄ましてみるとが大切だとするまどさんには、言葉の現在の問題点がはつきりと見えていたのかもしれない。確かにわたしたちは言葉の意味を大切にするあまり、端（はな）から嘘は駄目だとして、嘘の言葉を発する者の気持ちや感情を蔑ろにする傾向にあるのではないのでしょうか。それだけでなく、現在のテンポの速い生活リズムが、他人の気持ちや感情の揺れを汲み取ることのできない状態を加速させているようにも感じられます。このことが、今世間を騒がせている「いじめ」の問題にもつながっているようにも感じています。やり場のない感情を何にどうのようにしてぶつけることができるのか、互いがぶつかり合うことをよしとしない今の教育では、その悶々とした感情を心の内に抱え込んでしまうしかない。そして、子どもたちは、いずれその感情に爆発してもらおうしかなす術がない状態に追いやられてしまうのではないのでしょうか。

わたしは、言葉は、言葉の意味よりも、言葉にくっ付いている絵（イメージ）をうまく伝え合うことが相互理解では大切だと考えています。この絵をぶつかり合いながら伝え合う中に、前述の「言葉の嘘」への先入観的問題を解決する糸口が見えてくると考えています。また、他者をつまく受け止めることのできない「いじめ」のイメージを払拭し、「いじめ」という方法をとらないですむ他者との新たな関係のイメージを創出できるとも考え

ています。ただ、ここではそのことに触れる紙幅がないので、わたしが言葉にくっ付いている絵についてのように子どもたちに教えているのか、その一例を紹介することにしましょう。



以前、NHKの番組「ようこそ先輩」に出演してわたしの母校を訪ね、小学6年生に「詩のボクシング」の授業をしたことがあります。

まず、わたしが教えたのは、言葉には必ず絵がくっ付いているということです。りんごには、りんごの絵が、バナナにはバナナの絵がくっ付いています。その絵があるから言葉は納得できるし、理解もできるのだと教えます。もちろん、子どもたち個々に思い浮かべる絵は自由です。ただし、りんごといっているのにバナナを思い浮かべる子がいれば、それは間違った言葉の理解をしているということになります。抽象的な言葉にも絵はくっ付

いています。これはりんごやバナナのように、これが正しい絵だというものはありません。だから使うのに難しいところがあります。しかし、絵は必要です。例えば、子どもたちに愛ということばでどんな絵が出てくるかと尋ねると、ハートマークや家族の顔とかそういうった答えが多かったです。もちろん、テレビドラマのキスシーンとかもあるでしょうが、それは恥ずかしいから隠します。後で改めて尋ねるとそう答える子もいました。

繰り返しますが、言葉には絵がくっ付いてあり、その絵をうまく伝えるように言葉を組み立てなくてはなりません。そして、その絵が相手に伝わって初めてコミュニケーションができたこととなります。このことを理解したところで、次に絵の細部についての表し方を教えます。例えば、りんごでも皮がむかれ、いくつかに切られて皿に乗っているものと木になっているもの、木になっていてもまだ青いものとかいろいろあるわけです。それをりんごというのだけではなく、その状態をどのように言葉にして、それを他者に伝えることができるのか。実際にその状態が他者に伝わり、理解してもらったところで、その言葉は生きたものになると教えます。

続いて、その書いた言葉を声にすることを教えました。ここでは言葉にはさまざまな表情があることを教えます。また、声にすることで言葉にくっ付いている絵にいろいろな変化を与えることができることを教え、その声が他者に伝わってこそ本当の意味でその言葉が理解できたことになると教えます。



そして、そのことをより実感してもらうために「詩のボクシング」を行うのです。ここでは、子どもたちの聴く能力も求められます。そのことをよく表しているのが、判定を担当する子どもたちの感想です。良い感想は厳しいものです。そして、他者を受け入れられる子どもたちは、その手厳しい感想を次回に朗読する時のための参考になります。そのようにして、他者を自分の中に取り入れて行くのです。このことは、コミュニケーション力を高めるのにとっても大切なことです。なぜなら、他者が見えていないコミュニケーションなどあり得ないからです。



わたしがこの授業を行なう上でもう一つ注意したことがあります。それは、子どもたちから声が出てくるのを徹底して待つということでした。子どもたちの感じ方や声に出すまでの時間には個人差があります。すごく時間の掛かる子もいましたが、じっと待ちました。すると声

を出してくれるのです。受止めて聞いてくれるという信頼、これは自分の時間感覚ではなく、相手を待つ相互の関係の中に生まれる時間感覚でもあるのです。学校の制



限された時間内では難しいところもあるかも知れませんが、自分を受け止めようとしてくれていると感じられれば、子どもたちは声を出して来てくれるのです。そして、その声に触れることからコミュニケーションは始まるのです。ところが、今の子どもたちは、しっかり受け止めて待つてもらえていないのではないのでしょうか。だから、彼ら自身も待ち方を知らないように感じられます。

これは小学生より年齢が上になりますが、高校生「詩のボクシング」全国大会を行った時のことです。高校生たちが真剣に言葉を紡ぎ声に出すのを聴いて、あるラジオ番組のディレクターが、「どうしてそん



なに饒舌に言葉を声にできるのですか」と尋ねると、「聴いてくれる人がいるからです」と異口同音に答えているのを耳にして、今の時代は人の声に耳を傾けない、自分のことで精一杯で余裕がないと改めて思いました。そう思うと、人の声に耳を傾けない社会で育つ子どもたちの未来も透けて見えたような空恐ろしい気持ちにもなりました。

最後に、「詩のボクシング」は、この他者が見えないといわれている時代、つまり、ゲームやインターネットなどのバーチャルな情報によって肥大化させられた自我が、他者との具体的な関係を切り結ぶことを難しくしている中で、他者が見えていなければ先に進めない場となつていきます。わたしは今こそ、この他者をしっかりと受け止められる場の教育が子どもにとって大切なことであると強く感じています。

また、現在、声の言葉に対する様々な角度からの社会的な欲求が高まった状況が進行中です。この欲求は、これまでの書き言葉のパラダイムに対する反動だという人もいますが、そうではなく、人が人と関係を切り結ぶ時、そこでは裸の生（なま）の声を求め合わずにはいられないかったのだとわたしは考えます。なぜなら、声はいつの時代にも人と人が互いを理解し合うために、時には激しくぶつけ合いながら求め合わずにはいられない、見えざるもうひとつの体としてあつたからです。そして、「詩のボクシング」は、正しく子どもたちのその声を鍛え育てる場としてあり続けたいと願っているのです。

写真は全て、2006年9月2日に行われた「第2回『詩のボクシング』宮崎大会・小・中学生の部」の小学生の部からのものです。一つの学校でという枠を超えて集まった児童、先生、家族、地域の人たちが、「詩のボクシング」を堪能していました。

小学生の部（5人1チームでの団体戦）  
予選通過十六チームの在籍する小学校

倉岡小学校 赤江小学校 江南小学校 生目台東小学校  
池内小学校 檜北小学校（A） 檜北小学校（B） 生  
目小学校 学園木花台小学校 大淀小学校 住吉小学校  
住吉南小学校 宮崎西小学校 江平小学校 小松台小学  
校 木花小学校



初出「学校教育」二〇〇六年十月号  
編集・発行 広島大学附属小学校 学校教育研究会